The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | はじめに |
| Author(s) | 木村, 茂雄 |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 1-4 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/76995 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# はじめに

## 1．*Cultural Formation Studies*Ⅱの刊行に際して

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科が主催する「言語文化共同研究プロジェクト」のひとつとして2019年度に進めた共同研究 Cultural Formation Studies (CFS) の報告書である。CFS は、大阪大学大学院言語文化研究科教員、同文学研究科教員、名古屋外国語大学教員、バングラディシュのイスラム大学人文社会科学学部教員、言語文化研究科の大学院生などを「正規」メンバーとする研究会だが、そこには言語文化研究科を修了して大学の教職についているものなど、「非正規」のメンバーも数多く参加している。そして、東京、名古屋、金沢、岐阜などから集まってくるこれらのメンバーを抜きにして、この研究会は成り立たない。これらの OG / OB が現役の院生たちに与えるアドバイスや刺激も、たいへん有意義なことと感じている。

研究会のこのようなメンバー構成には過去の経緯がある。というのも、Cultural Formation Studies (CFS) は、25年近く前にはじめた研究会の「後継」の「後継」にあたるからだ。その最初の研究会は、1996 年の春に開始したカルチュラル・スタディーズの研究会「カルチュラル・スタディーズ・サークル (CSC)」である。「言語文化共同研究プロジェクト」の制度がスタートしたのは2000年度なので、その4年前のことになる。その後、2005年度から2017年度までは「ポストコロニアル・フォーメーションズ (PCF)」と研究会の名称を変え、どちらかといえばポストコロニアル研究に焦点を絞った研究を進めてきた。

研究会の名称をこのように変えてきたのは、ひとつには、その時々のメンバーの関心を反映させたためである。この数年は、とくにアメリカ文学・アメリカ文化を専門とする教員や院生のメンバーが増えてきたようだ。しかし、1996 年当時から現在にいたるまで、研究会の名称は変わっても、また、そのメンバーに多少の入れ替えはあっても、文化や文学の研究に対する私たちの基本的な姿勢や視点には、ある連続性が保たれてきたように思われる。簡単にいえば、ひとつには、文化や文学を社会に開かれたものとみなし、その相互関係や相互作用を（必要に応じて「学際的」に）捉えようとする姿勢、そのこととも関連して、もうひとつは、それらの文化や文学が形成されるプロセス（フォーメーション）を注視しようとする姿勢である。

そして、このような姿勢は、私たちがカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究から学んできた姿勢にほかならない。昨年度から研究会の名称を Cultural Formation Studies (CFS) と改めたのは、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究の基本

姿勢から学びつつも、特定の狭い「分野」に特化した研究会という印象を避け、その門戸を、より幅広く多様な領域に開いていきたいという意図が込められている。

## 2. 2019 年度の CFS の活動

CFS の研究会は、原則として毎月の最終土曜日に開いている。たいていは文化や文学にかかわる英語文献を取り上げ、それぞれの担当者がその内容を紹介し検討した後、全体討論に入る。このようにして、先行研究の趣旨や意義、欠点や盲点などを議論していく。それはまた、私たち自身の批評意識や批評の言葉を鍛えていくプロセスでもある。

2019 年度の最初の研究会は、昨年度からの継続で、エドワード・W・サイード（Edward W. Said）の *Humanism and Democratic Criticism* (Palgrave Macmillan, 2004) の最終章を取り上げた。その後、やはり昨年度前半に取り上げた *Conflicting Humanities* の編者の一人であるロージ・ブライドッティ（Rosi Braidotti）の「ポストヒューマン」と人文学についての議論に一度立ち返った後、ガヤトリ・スピヴァク（Gayatri Chakravorty Spivak）の *Readings* (Seagull Books, 2014) に取り組んできた。

以下、その研究会の記録を残しておきたい。開催日、章とタイトル、担当者の順に示す。研究科の修了生で大学の専任の職についているものには、現職の大学名も付記しておく。

1. 2019 年 4 月 20 日（Said, Edward W. *Humanism and Democratic Criticism*. Palgrave Macmillan, 2004.）
・Chapter 5 “The Public Role of Writers and Intellectuals,” pp. 119-144.
pp. 119-131. 石倉綾乃；pp. 131-144. 小杉世
2. 2019 年 6 月 1 日（Rosi Braidotti, *The Posthuman*. Polity Press, 2013.）
・Chapter 4 “Posthuman Humanities: Life beyond Theory,” pp. 143-185.
pp. 143-164. 村上八重子；pp. 164-185. 古東佐知子（岐阜市立女子短期大学）
3. 2019 年 7 月 27 日（Gayatri Chakravorty Spivak, *Readings*. Seagull Books, 2014.）
・“Introduction,” pp. 1-27.
pp. 1-14. 桑原拓也；pp. 14-27. 安保夏絵
4. 2019 年 9 月 21 日（*Readings*）
・Chapter 1 “Fanon Reading Hegel,” pp. 28-66.
pp. 28-40. 山田雄三
5. 2019 年 11 月 9 日（*Readings*）
・Chapter 1 “Fanon Reading Hegel,” pp. 28-66.
pp. 40-57. 稲垣健志（金沢美術工芸大学）；pp. 57-66. 松本ユキ（近畿大学）
6. 2019 年 12 月 14 日（*Readings*）
・Chapter 2 “Reading Spivak,” pp. 67-98.
pp. 67-76. 小倉永慈；pp. 76-85. 加瀬佳代子（金城学院大学）

7. 2020 年 2 月 1 日（*Readings*）
・Chapter 2 “Reading Spivak,” pp. 67-98.
pp. 85-98. 久保和眞
・Chapter 3 “What Happens in the Text?” pp. 99-141.
pp. 99-111. 松本承子

## 3. スピヴァクのことなど

今年度も、まずはスピヴァクの *Readings* の検討を続ける計画である。彼女の著作は *Other Asias* (2008) や *An Aesthetic Education in the Era of Globalization* (2012) など、これまでの研究会でも何度か取り上げてきたが、私たちの研究会とスピヴァクとには、やや因縁めいた関係さえある。前述したとおり、CFC が活動開始したのは 1996 年の春だが、その年の 7 月に、言語文化研究科が主催した国際シンポジウム「言語文化学の可能性」のために彼女が初来日したのだ。スピヴァク 54 歳のときである。研究会の古いメンバーなら、このときの彼女のことがまだ記憶に残っているにちがいない。私もそのひとりなので、少し回顧談を述べさせていただきたい。

当時の研究会メンバーを中心とする何人かの教員は事前に、スピヴァクの講演の日本語訳を準備するよう指示されていたのだが、たぶん彼女のいつものパターンなのだろう、その原稿が届いたのは本番の数日前のことだった。その難解な内容と表現を短時間で翻訳するのに四苦八苦したことを覚えている。この翻訳の取りまとめと当日の講演の通訳は、この論集にも寄稿している伊勢芳夫氏が中心となったが、何としても解釈困難な部分を直接スピヴァクに質問しに行ってもらったりもした。そのときの彼女は、伊勢氏たちにサンドイッチをご馳走してくれたうえに、質問に対して非常にわかりやすく答えてくれたとのことだ。

これは「分科会」でのスピヴァクの講演の話だが、この国際シンポジウムは、「分科会」の講演でも「全体シンポジウム」でも、使用言語を英語に統一するといったことは避け、ロシア語やフランス語などを母語とするパネラーにはその言語で発言してもらい、それを研究科教員が通訳するというスタイルをとっていた。この配慮についてスピヴァクは、全体シンポジウムの席で、「私の母語は英語ではなくベンガル語だが、それに対する配慮はみられないようだ」、「象徴的なリクエスト（symbolic request）として、私が 20 年後にまたここを訪れるようなときには、ベンガル語の通訳が可能になっていてほしい」といった趣旨の発言を行った。「多言語主義」をうたってはいるものの、その内実の偏りを突いた発言として、私の印象に強く残った。

スピヴァクが 2 度目に大阪大学を訪れたのは、2012 年の 11 月のことである。この年、彼女は京都賞という大きな賞を受賞し、その授賞式と記念ワークショップのために京都を訪

れた。その流れでの大阪大学への訪問である。このときの講演自体は比較的短いもので、大阪大学と稲盛財団主催の「学生フォーラム」として、おもに学生の質問に彼女が答える形をとっていた。1996 年の国際シンポジウムから 20 年後ではないにせよ、16 年後のスピヴァクも日本でいえば古希を迎え、だいぶ「丸くなった」という印象も受けた。それはともかく、私は彼女の「象徴的なリクエスト」を忘れてはいなかったので、ひょっとすると、私たちはそのリクエストに応えられるようになっているかもしれない、とも思った。大阪大学と大阪外国大学が統合したのが 2007 年のことで、2012 年には言語文化研究科が世界言語研究センターと組織統合し、とくに言語社会専攻が大きく拡充されていた。そして、その授業科目には「関連研究言語」として、ベンガル語も含まれていたからである。

いま研究会で検討しているスピヴァクの *Readings* は、彼女がインドの名門大学のひとつであるプネー大学の英文学科の学生に対して行ったセミナーをもとにしている。そこでも、「英語のできる学生」が他のインドの言語文化とどのように接するべきか、あるいは、英語を母語としない者が英語文学を読む意義はどこにあるのか、それをどう読めばいいのか、といった問題意識が根底に流れている。ただし、この本の検討もまだ道半ばなので、できれば別の機会に、この本の私なりの「読み」を紹介することができればと思う。

論集の「はじめに」で私事を書き連ねて恐縮だが、私は 2020 年 3 月末に言語文化研究科を退職し、この 4 月から名古屋外国語大学につとめている。CFS には、若干名の参加が認められる「他大学教員」として加わることになった。しかしその矢先に、新型コロナウィルスの影響で、研究会自体が開催できない状況がつづいている。*Readings* の検討を CFS のメンバーと楽しく再開できる日が訪れることを心待ちにしている。

木 村　茂 雄